沈曾植の北碑論

菅野智明

はじめに

民国時期に復興を遂げた草法実践の先導者とされる沈曾植（同治三〇～民国一一、一八五〇～一九二二、字は子培、乙盦または寐叟などと号した）は、実践の基盤としての歴代書法の賞鑑にも一家言を有した書人である。目下その成果は、題跋・札記の形で豊富に伝存しているが、一纏まりの専著ではなく散在するこれらの文献では、素材・対象としての扱い難さが不可避的に存するためか、これまで必ずしも十分に研究されてこなかった。既に著者は、沈氏論書とすべきこれら文献について、書誌学的な検討に比重を置きつつ発掘・整理し、併せて現下若干備わる先行研究を回顧した。[1] これら先人の説は、ここで著者が網羅した文献目に限なく論及するものではなかったが、沈氏論書の特質として、南北（もしくは碑帖）の互証――阮元理論以来、対立的に捉えられてきた碑帖・南北について、その相関性に着目する姿勢であり、書学史的に見て、碑学の所謂「尊碑抑帖」という急進的な思潮に反し、旧来の帖学にも一定の評価を下す論者によって形成されてきた――を指摘する点ではほぼ共通の見解が認められる。従ってこの互証論は、以後如上の文献目において綿密な検証を必要とするが、ここで留意さるべきは、こうした互証論の前提・基層を成す北碑観・南帖観の問題である。上記の先行研究は、北碑・南帖双方の全体像を明瞭に示すまでには至らず、互証論は、手法としての創新は認め得るも、沈氏の包括的な論書体系の中に、確固とした位置を占めてはいない。

以上の点に鑑み、小論では先ず、彼の北碑論の側に着目することにした。伝存の沈氏論書では、拓本の鑑別や書誌学的な考証を主とする法帖論が圧倒的割合を占め、碑刻をめぐる言説は至って少ない。加えてこれらの部分的な伝存も、検討の大きな障壁となっている。しかし偶存のこれらも、逐一の分析と統合、そして当時書壇を風靡した種々の

北碑論との対比によって、南帖との互証に至る特色ある北碑観を導き得ると考える。ここでは、当時の北碑論の潮流に沈氏論書を位置付けつつ、その書学史的意義についても考察したい。

一、伝存の沈氏北碑論書文献

先ず、検討対象とすべき沈氏の北碑論を整理・確認しておきたい。ここでは便宜的に（一）文中に北碑、もしくは北朝書法に関わる語、そして実際の北朝石刻の名が検出できる言説、（二）或いはそれを標題とする一纏まりの言説、を取り上げることにした。以下には該当の言説を、著者による次の一～三の執筆年代推定を交え、年代順に番号を付して整理した。以降各言説は、便宜上この番号で呼ぶことにする。

一、『寐叟題跋』所収の言説（標題中「跋」字が備わるもの）中、無紀年のものは、既に著者が導いた書風による断代法[2]に基づいて推測した。

二、『海日楼札叢』所収の言説（一）で所属の札記名を付したもの）は、先述の前稿で大よその年代推定を試みている[3]。

三、21、25の尺牘も無紀年。21については著者の別稿[4]で予測している。25は前半部の肉筆影印が存することから、上記の一に従って断代。またこれらとともに『同声月刊』誌に録される24、28については、二の前稿で下記の如き見当を持った[5]。

1、	北斉書人〔護徳瓶斎渉筆〕	光緒8・9
2、	安呉中画豊満之義〔同右〕	同右
3、	高湛墓誌跋	光緒15
4、	張猛龍碑跋五篇	光緒17
5、	太昌造像跋	光緒11～17頃
6、	崔敬邕墓誌跋	同右
7、	張黒女墓誌跋二篇	光緒26・27
8、	禅静寺刹前銘敬使君碑跋	光緒28～34頃
9、	曹恪碑跋	宣統2
10、	題崔敬邕志拓本	同右
11、	北周碑刻跋	宣統2頃
12、	元宴刻本十三行跋	民国元～2頃
13、	李璧墓誌跋	同右
14、	賈使君碑跋	民国3
15、	校官碑〔菌閣瑣談〕	民国3頃
16、	旧館壇碑〔同右〕	同右

17、劉懿墓誌〔同右〕　同右
18、張猛龍碑〔同右〕　同右
19、文皇率更伝六代之筆法〔同右〕　同右
20、敬史君碑五跋　民国3～8頃
21、羅振玉宛尺牘　民国3～4頃
22、星鳳楼祖本黄庭経跋　民国4～7頃
23、寧贊碑跋　同右
24、海日砕金　民国初期
25、謝鳳孫宛尺牘　民国8以降
26、南朝書分三体〔全拙庵温故録〕　民国8
27、六朝墓誌・附隋〔同右〕　同右
28、書法答問　民国10

二、優品の系譜

以上の各言説を基に、本節では、碑刻をめぐる沈氏の品等について、優品とされる碑刻の師承や様式的脈流に関する論及にも目を配りながら、検討を加えることにしたい。

先ず北魏期の碑刻では、敬使君碑跋8に

北碑楷法、當以刁惠公誌、張猛龍碑、及此銘（敬使君）爲大宗。刁誌近大王、張碑近小王。

とあり、27の寇偘墓誌評にも「乃知張神図、刁惠公眞大書家筆。」とするなど、当該碑刻を主題としない中立的な言説で張猛龍碑、刁遵墓誌が取り上げられることから、この二刻が双璧として位置するようである。一方、その張猛龍碑を主題とした比較的早期の跋4では「龍藏近右軍、清頌近大令。」と、張猛龍に龍藏寺碑を対峙せしめる言もある。だが、該跋の別則では、沈氏が私淑する包世臣・張裕釗まで末裔に配し、張猛龍と刁遵・鄭文公の類を対比的に捉えた言があることから、この別則の見方が、後の8 27に発展したと考えられる。

さて、4の言説は、包世臣『芸舟双楫』論書（以下『安吳論書』と略）を多分に想起させる。先ず該書の「述書下」には、黄乙生（小仲）の教示として「張猛龍足繼大令、龍藏寺足繼右軍」との言が紹介されており、4は全くこれを承ける。8で二王が各々比況されるのも、この黄氏の言に示唆を受けてのことだろう。こうした南北・碑帖の互証については後述する。

また4では、「（龍藏寺）運用師中郎…（張猛龍）鋒距出梁鵠」「（張猛龍）奄有鍾、梁勝境」とも言う。これも『安吳論書』歴下筆譚、論書十二絶句において展開される、中郎（蔡邕）派が鍾繇、梁鵠両派に分岐するという、包氏独自の伝流論にそのまま従った見解と見ることができる。この包

氏の伝流論では、鍾繇＝乙瑛派に刁遵ほか経石峪大字、雲峰山五言、鄭文公碑を、一方の梁鵠＝孔羨派には張猛龍ほか賈使君碑、魏靈蔵・楊大眼・始平公各造像を各々配し、北碑の二系統を提示する。沈氏の双璧は、まさにこの枠組を踏襲する訳である。

もっとも、この枠組は、方・円の二分論という形で、当時の碑論にはかなり通行していたように見受けられる。既に著者は、上掲包説、康有為『広芸舟双楫』、そして李瑞清「玉梅花盦論篆」の三著における方・円二分論を概観している。[6] この他張宗祥『書学源流論』時異篇・六朝での北碑論、また劉師培「書法分方円二派考」(『国粋学報』三巻・七期・美術篇)等も、その典型的な例と言ってよい。この時期、様式分類上の方円という視座は、一定の有用度をもって論者に迎えられていた。

ところで、上記諸家の論書では、方筆派の代表格に張猛龍碑を推す点で沈説と一致が認められるものの、円筆派では鄭道昭摩崖が概ね優位に置かれている。包氏の「篆勢分韻草情畢具其中」という激賞は夙に知られるが、沈説の場合、こうした鄭書賛は影を潜める。沈氏の鄭書評には、門弟謝鳳孫へ該碑の習書を説いた25があり、そこでは

雲臺山無石室銘、但有論經書詩耳。皆道昭書。而碑體謹嚴、摩崖體較縱。其超逸蹁躚、眞令人對之飄飄有淡雲氣也。論韻格徑恐在鶴銘上。

とある。該碑を瘞鶴銘より上位にするなど、確かに一定の評価は認められる。しかし、それはあくまで「摩崖體」としての評価であり、むしろここでは、摩崖から区別され「謹嚴」と称えられる「碑體」即ち碑碣、墓誌に、沈氏の志向を窺い得る。伝存の沈説の部分性は踏まえるべきだが、鄭書に代わり刁遵を推す品等には、書写の「場」の問題が与るようである。この点は後述したい。

さて、その刁遵は、当時墓誌中の傑作と目されていたことも事実である。『安吳論書』では、先述の如く鍾繇＝乙瑛派に墓誌として唯一これを掲げ、上掲康氏論書も、これを「十六宗」の一に置く。更に楊守敬『激素飛清閣評碑記』巻二では、墓誌の「冠」とあり、陶濬宣『稷山論書詩』[7]第二四首識語も、「北朝無精於此者」とする。沈氏の品等は、この流れに沿うことを確認しておきたい。

続いて東魏期に目を転じよう。該期で先ず注目されるのは、上掲8に見る敬使君碑であり、これは『安吳論書』歴下筆譚が、鍾・梁両派の碑刻の他に「李仲璇、敬顯儁別成一種、與右軍致相近」とすることと密接に関連する。8の他、20にも該碑評がある。両跋ともに該碑自身が主題であ

り、この点に割引きの余地を残すが、いずれも蘭亭・黄庭を重ね合わせ、そこに南北融合の関鍵を見ている点には、確固たる主張が読み取れる。この碑は北魏の双璧に次ぐ第三局と見做してよい。また20では、この碑を包氏に繋げている点も興味深い。同様の見解は張宗祥上掲書の勢異篇、溯源篇にも窺えるが、かかる師承の提示も、この碑への傾注の一斑と捉えることができる。

この他東魏期の碑刻では、李仲璇碑、高湛墓誌が、以下の碑刻との比較において各々例示されており、この点が目につく。

李仲璇碑：劉懿墓誌（17）、寇偘墓誌（27）、侯海墓誌（27）

高湛墓誌：張滿墓誌（27）、元賢墓誌（27）、穆子厳墓誌（27）

李仲璇は、上記『安呉論書』が敬使君とともに別格に置くことと符合する如く、沈氏もこれを一つの指標として留意する。ここでは、対照の墓誌から見て、篆法を交えた雑体書の流れに着眼するようである。一方高湛は、3に「敍畫平近北碑、峻落反收、舊法稍漓矣。」とある通り、「舊法」から、後述する「平易」なる様式への移行が説かれる墓誌であり、対照の東魏墓誌も、この主旨に合致した様式を湛える。東魏期の碑刻例として、両碑に比較的纏まった言説があることは、雑体書の広がりと新法への移行という、該期特有の二潮流が沈氏において見通されていたことを窺わせる。

さて、上述以外の碑刻で、実作上の淵源として評者に屢々指摘されてきたのは、所謂二爨である。これについてはどうか。25では爨竜顔、15では爨宝子（と推定される）が掲げられ、各々隷法の残存と漢・呉の継承を話題にするものの、それ以降の北碑との関連については言及がない。但し狄平子によれば「沈寐叟謂、北碑宜習張猛龍、爨寶子等。」とある。[8] 二爨については、この言を裏付ける、更なる沈説の発掘が俟たれるところである。

三、南北互証の諸相

続いて沈氏の互証論を見ることにしよう。はじめに略述した通り、従来それは沈説の特色とされてきたが、未だ十分な精査は備わらない。ここでは可能な限り具さに、該当の所説を汲み上げたい。

先ず互証論の基本姿勢を述べたものに26「碑碣南北大同、大較於楷法中猶時沿隷法」があり、上掲4では「南朝碑碣罕傳、由北碑擬」ともする。これらは紛れもなく、「（南北）

兩派判若江河」という阮元『南北書派論』における武断への反論である。もっとも、この反論は、当時の碑論に広く行われていた。葉昌熾『語石』南朝一則や楊氏上掲書の各種造像記の条――両説は後掲の劉咸炘『弄翰余瀋』で紹介される――或いはまた康氏や李氏の上掲書等、[9] これらは、南北双方の個別碑刻から、共通した書勢を指摘することで、阮説の論駁を試みている。

更に沈氏は、『流沙墜簡』の披見を契機に、碑刻のみならず法帖の真相も見極めようとした。この点は、王国維や曾熙の関連する言説を絡め、前稿で触れている。[10] 加えて陶氏上掲書にも互証を法帖探究に繋げる言があり、[11] 当時の碑論の一部は、既述の「抑帖」に慎重な姿勢を持したことが知られる。

それでは、論及に至る碑帖・南北互証の具体相を検討したい。先ず注目されるのは、上掲4、8に見られた、二王の北碑への比況である。

4 ｛龍蔵寺：羲之 / 張猛龍：献之｝　8 ｛刁遵：羲之 / 張猛龍：献之｝

二王を対比的に捉え、個別の碑刻に結び付ける賞識法は、先述の通り、『安吳論書』の黄小仲の言から直接示唆を受けていよう。但し沈氏の二王対比論は、上記した北碑への比況を除いても頻繁に認められる。以下、各言説の二王にかかる関鍵語を、「羲之／献之」という形で整理すれば、「簡勁／縦逸」(15)「簡嚴／狼藉」(菌閣瑣談・右軍筆法)「中近實／中近虚(篆書中實、分書中虚)」(同上・中画中虚)「筆筆皆斷／筆筆皆連」(25) となる。これらは、単に黄小仲を模するのみならず、『文章志』『古来能書人名』『論書表』等、六朝書論で盛行した二王論[12]にまで立ち返った跡が看取できる。即ちここでの二王対比は、様式・技法上の新旧の差異を基調に描かれるのである。

その結果、張猛龍が新法たる献之の側に置かれることは、実に興味深い。後述の如く、方筆系碑刻に隷法の残存を見る沈氏は、「中虚」たる「分書」を接点に、両者を結び付ける訳である。また、方筆に感じられる筆力の発散は、「簡勁」「簡嚴」よりも「縦逸」「狼藉」の語に、深く関わってくる。それは、8「内厭外拓、藏鋒抽穎」という技法的対立において、後者の「外拓」「抽穎」に繋がるものでもある。これに関連して、陶氏上掲書の第十一首識語では、「乙盦謂、龍門造像其掠法、竟與洛神同勢」と沈説が紹介されている。陶氏も方筆派を念頭に置いた北法に献之を見るが、龍門にまで擬える沈氏の斬新な提起は、陶氏に強い印象を与えたようだ。

もっとも、二王と北碑の間に厳然と存する書風の径庭からすれば、沈氏のかかる比況は飛躍の憾みも猶残る。しかし、対峙する二様式を象徴的にモデル化するという意味では、一応の効果を発揮していることも確かである。北碑の体系化に、南朝文献書学の伝承的テーマを重ね合わせる手法は、それに通じた沈氏ならではの発想であり、この点は沈説固有の特色として、更に知られてよい。

さて、こうした比況の一方で、沈氏は、具体的に個別碑帖の互証も試みている。北斉までを射程に、以下それを整理しよう。

鄭文公（25）――――大令草法（閣帖）
張猛龍（4）――――楽毅論
元略墓誌（27）――――黄庭経
敬使君（8 20）――――定武蘭亭
文殊般若（12 22）――――庾亮、山濤（閣帖）
龍門造像（上掲陶氏論書）――――洛神賦十三行

ここでの南帖は、上記の比況論に符合するかの如く、二王の名品が中心である。しかし、その個別碑刻との対照は、上記比況と乖離する。先ず、方筆派に擬えた献之の書が、ここでは鄭文公、文殊般若と、円筆系碑刻に比重を置いて配される。そればかりか、刁遵に繋げられた羲之の書は、却って張猛龍に擬えられ、更に南北融合を説く敬使君でも意識されるなど、方筆派も包摂するかのニュアンスを持たせるに至る。こうした点に、観念的・象徴的な次元での比況論と、個別碑帖の具体的な比較対照という、沈氏互証の懸隔する二相が浮き彫りにされる訳である。

さて、上記における円筆系碑刻と献之の対照は、実際の筆法上さほど無理はない。羲之の書も、現実的な書風の対照からすれば、こちらに置かれて然るべきだが、ここでは、方筆も見据えて配される。これには、沈氏の羲之尊称が与っていると考えられる。例えば何紹基「跋宋刻十七帖」「跋王鑒斎蔵虞恭公温公碑旧拓本」（『東洲草堂金石跋』巻四・五）では、定武蘭亭、曹娥、黄庭が、北派も兼ねるとする言がある。これは、書聖たる羲之に、北派的な方筆の兼備を見ることで、絶大な書格を与えんとする、崇拝姿勢の表れと見ることができる。ここでの沈氏の対照も同様であろう。先述した対等な二王比況は、もはや意識されてはいまい。

ところで、かかる個別碑帖の互証は、当時の碑論でも断片的に散見する。上記『安吳論書』の如く、刁遵を鍾繇に擬える言もあるが、管見では殆どが二王の小楷を指標としている。例えば、楊守敬上掲書・巻二では、都邑師道興造

像・古験方を黄庭、楽毅に、譚献『非見斎審定六朝正書碑目』では、司馬景和妻墓誌を洛神賦に、鄧州舎利塔記を黄庭に、各々当てている。一方、二王小楷を摩崖の大字に繋げる言も出てくる。これは『安吳論書』答熙載九問の「鶴銘神理、正同内景」を承けていよう。何紹基上掲書「題楊龍石蔵瘞鶴銘水拓旧本」「跋玉版洛神賦十三行」では、瘞鶴銘に黄庭、十三行が繋がれ、李瑞清上掲書の鬲攸（攸）比鼎派でも、瘞鶴銘と黄庭が同系に置かれている。更に李氏は、黄庭から石門銘まで見通しており、同旨の言は、彼の盟友曾熙からも窺える。[13] 沈氏が文殊般若という大字に黄庭、洛神賦を見ることは、これら一連の摩崖論と軌を一にしている。

以上からすれば、沈氏の個別遺例互証は、当時の碑論に若干認められた、二王小楷を中心とする互証の一環として捉え得る側面がある。しかし、南帖では二王の他閣帖の諸跡を盛り込み、一方北碑では、大胆にも方筆系遺例を視野に入れるなど、その互証対象の拡充には、時の碑論からの、一層の先鋭化を見ることが可能である。先の二王比況とは別方向で、これら個別遺例の互証は確かな足跡を残している。

ところで、これまで見てきた互証論は、既述の通り南北の同質性を前提に展開するものであった。ところが沈氏は、これとは相容れぬ見解を同時に抱いている。それは27の個別墓誌評に端的に表れる。

南人北度者爲之…行筆縱宕（王紹墓誌）
多行筆、北碑至此合南帖（王僧男墓誌）
波發沿北、秀韻近南（元欽墓誌）

ここでは南法に「行筆」「秀韻」、北法に「波發」と、南北固有の特性が明らかに意識されている。これは、単に南北の別を初めから不問に附してしまう、先の「碑碣南北大同」という基本姿勢とは、全く趣旨を異にする。これは時期的な変容ではない。24において沈氏は、劉熙載『書概』第九九条の「北書以骨勝、南書以韻勝。然北自有北之韻、南自有南之韻也。」という言を評して「實則南骨卽北骨、北韻卽南韻。」とし、極端に南北差を否定してもいるのである。一方で南北の同質性を主張しながら、他面ではその対峙する独自性を前提に賞識する、沈氏はこうした矛盾を孕んでいる。だがこの矛盾は、阮元の提起以来、南北書派説の受容に揺れるこの時期の論壇を象徴しているように思われる。

既述の通り、阮説批判は、その「兩派判若江河」という、截然とした南北区分に集中した。沈氏互証もこれに端

を発する。だがこの批判は、勿論阮説の全否定にはなり得なかった。その限界を自認する次世代の論者は、今度は阮説を是とする雍護論を展開する。例えば梁啓超『飲水室題跋』蕭憺碑跋では、自来同質とされる該碑と馬鳴寺碑に南北差を見、「阮文達南北書派之論、最不可易」とする。また劉咸炘上掲書も、一二の南北互証によって阮説は覆らぬとし「北碑南帖自是確論」と説いた。両説は、上掲の葉昌熾や楊守敬の所説を論難するなど、反阮氏説への反論として一つの流れを形成する。確かにかかる反反論によるまでもなく、南北派説には抗し難い一定の道理がある。沈氏もこの点は当然承知していたであろう。

北宗之説、始自馮定遠、不始阮雲臺。北碑之開、起於陳子文、不起包愼伯。(24)

由南帖入北碑、則陳香泉爲先覺者也。(28)

など馮班、陳奕禧に阮説前史を見通す言があるのは、南北対峙への一定の理解を前提とするものと解される(14)——但しここでは、南北説に甘んずる代り、その功績を独り阮氏に帰一しようとしない、末節での対抗意識が感じられてならない——。

ともあれ、沈説は阮説批判に徹し得なかった。先の墓誌評に見る、北方での古法(隷意)の残存と、南方からの行意の侵蝕(=隷法の逓減)という対立図式は、明らかに阮説の継承である。阮説の積極的な再評価は、次世代の梁・劉の説を待たねばならぬが、沈説には、それへの推移を如実に見ることができる。

さて、こうした言が個別の墓誌評に集中的に認められることは、それなりの理由が存するようである。次節において、改めてこの点を考察したい。

四、書の場論と北派の演変観

既掲の26は、書写される「場」を主題とした短条であり、「南北大同」の碑碣の他に、「写書」「簡牘」を掲げる。

南朝書習、可分三體。寫書爲一體、碑碣爲一體、簡牘爲一體。樂毅、黃庭…皆寫書體也。…簡牘爲行草之宗、然行草用於寫書、與用於簡牘者、亦自成兩體。

三種が羊欣『古来能書人名』での鍾繇がものした三体書、即ち章程書、銘石書、行押書を踏襲していることは疑う余地がない。「於楷法中猶時沿隷法」と説かれる碑碣=銘石書は上記4の通り、多分にその北方性が意識されていよう。それに比して写書=章程書は、二王の小楷が例示され、洗練された楷、そして行草書が念頭に置かれる。

この点から注意されるのは、27寇治墓誌評の「諸碑可作

寫經觀…彼爲寫經體、此爲寫銘體。」という言である。寇治が「寫銘」＝碑碣体である以外、一般の「諸碑」（ここでは墓誌の謂）は「寫經體」即ち写書・章程書と見做すのである。更に10崔叙邕墓誌評では

此書使轉縱横、筆法墨法、皆可從刻法中想像得之。河北無行押書、傳世藉此、可意測其運用也。

とし、墓誌を行（押）書が発揮される場とする。以上によれば、墓誌評を中心に、南北一致の言が頻見するのは必然の結果と言えるだろう。写書・章程書に通ずる場である墓誌は、南法的行意の導入を容易にする環境なのである。隷意が薄れず北法を留め置く碑碣と、それが行意によって逓減する墓誌、双方の場に性格上の差異を見出した点は、他の碑論に見られぬ沈説の一大特色である。

これら墓誌評の一つ3には、次の如き言説も見られる。

大抵北朝書法、亦是因時變易。正光以前爲一種、最古勁。天平以下爲一種、稍平易。齊末爲一種、風格視永徽相上下、古隷相傳之法、無復存矣。

ここで着目されるのは、北派の演変を数期に断代した点である。とりわけ北魏期を正光前後で区分する点は旧説に見ない。例えば、康氏上掲書の「備魏十」が、北魏期を一括して他期からの優位を謳い、劉氏上掲書も、「北魏書、筆方舖而曲、勢横宕而廣、乃出於八分。北齊承之、或變趣瘦削。」とするなど、当時は大摑みな論が通行していた。沈氏の区分によって、北魏における「古隷相傳之法」の漸層的な減少が、より精致に見通されることになった訳である。

沈氏論書に確認できる正光年間の碑刻は、李璧、王僧男、李超の各墓誌と、張猛龍、高貞の二碑である。先に互証で触れた王僧男の他が、自来方筆派として著名であることは言うに及ばない。李璧を話題とする12に「書法峭勁、極似張猛龍」とあることからも、これら方筆碑刻が「古勁」の典型的な体現例であったことは明らかである。一方、正光以後の北魏碑刻には寇治、寇偘、劉玉、元略、元欽、張黑女、元彧の各墓誌があり、南性の指摘される墓誌が目につく。正光に境界を見ることは故なしとしない。因みに、その後の北魏期の断代論としては、従来梁啓超の説が注目されてきた。彼は画期を正光から大和まで溯らせた。劉濤氏は、それを梁氏「品評書法」[15]の二大特徴の一とし、「獨到的見解」の意義を喚起されるが、かかる梁説も、この沈説からの脈絡として捉える必要が生じてくるのである。

ところで、これら断代史論が墓誌を中心に展開されるの

は、それが数量的に豊富で、猶且陸続と出土することに大きく起因する。沈説27も近出墓誌が多く、執筆時の最新の知見が反映されているようである。では何に依ったのだろうか。結論から言えば、羅振玉が提供した資料（拓）であった可能性が頗る高い。彼との交誼は21にその一斑が窺え、[16] また25によれば、沈氏は羅氏輯『六朝墓誌菁英』を手にしている。もっとも、この著録が収める27墓誌は僅か二件に過ぎない。だが実は、一方で羅氏が撰した一大題跋集『雪堂金石文字跋尾』によれば、27墓誌の大半は著録されている。沈説の背景には、出土文物に機敏に対応し得る、当時の金石収蔵家との交誼が存しているのである。

おわりに

小論では、沈曾植の散在する論書から、北碑に関する言説を集め、南北の互証論も視野に入れつつ、彼の北碑観を考察した。その結果を箇条的に整理すれば、次のようになる。

一、北碑の品第体系は、包世臣の書流観、及びそれに続く当時の碑論での方円による様式的枠組が、色濃く投影されている。但し鄭書摩崖より刁遵墓誌を取る点に、彼の墓誌志向の一面が窺えた。

二、従来沈氏論書の特質とされてきた互証論では、多様な側面が見出せた。上記方円の様式対峙を、六朝以来伝承されてきた二王の対比によって象徴的に擬える側面。鋭意比較対象を拡充しつつ個別碑帖を突き合わせる側面。更に阮元説への追従と反発の錯綜も互証論に多面性を齎す要因として見逃せない。

三、碑碣と墓誌に、書の場としての差異を見出したことも卓説とされる。章程書を想定し、南法的行意の浸透を容易にする墓誌は、刻々と新出する豊富な資料でもあった。かかる墓誌を主軸に据え、沈説は後人の論を開く、より精緻な北派の演変を見通した。

再三述べてきた通り、散在する言説を対象とするこの種の研究では、幾多の制約が重層的に存している。小論での検討も、更なる発掘資料から裏付けねばならぬ部分が猶多く残されており、この点は以後の課題としたい。

ところで、沈氏互証に着目する従来の研究では、沈氏互証と当時の碑学とに際立った対立を見、そこから沈説の創見を強調することが多かった。例えば胡伝海氏は、沈説を、康有為等の「破壊力」を伴う碑学への「一種對抗」とし、[17] 耿飛氏も、沈説と、「粗廣拙樸之外在美」を見出す康氏等「尋常人」の所説との相違を指摘する。[18] しかし、小論

の通り、当時の碑学が「破懐」的で、「粗廣拙樸之外在美」のみを注視してきたとは到底見做し得ない。そればかりか、これら碑論が抱える書流観、碑品観は、基本的に沈説と共有されているのであり、沈説はこれら碑論の互証を拡大・充実させていったのだった。沈氏互証は、時の碑論からの連続的な進展こそ特筆せられるべきなのである。

但、確かに康氏上掲書、碑品十七を中心とする彼独自の格付け、即ち円筆系摩崖や様式的に未洗練な書風を推す姿勢には、沈氏との径庭を認めざるを得ない。耿氏はまた、康沈両説における様式形象の評語を比較し、「沈曾植于北碑別有意會」と結論づける。しかし両者の個別碑刻への評語を対照するなら、以下の通り接点も多い。[19]

張猛龍：〈康〉峻茂、峻整　〈沈〉風力危峭（4）、峭勁（12）

刁遵：〈康〉虚和圓靜、茂密　〈沈〉茂密（6）

鄭書摩崖：〈康〉飛逸渾穆、奇逸　〈沈〉超逸騙蹤（25）

龍蔵寺：〈康〉虚和圓麗　〈沈〉純和蕭遠（4）

康氏論書では、沈説をはじめ時の碑論に通ずる、さほど「昂揚激進」（耿氏）ではない側面へも、一定の理解が必要ではないか。そもそも『広芸舟双楫』の執筆を康氏に促したのは、他でもなく沈氏である。この点については改めて論じなくてはなるまい。

さて、沈氏の碑論を俯瞰した場合、今回論じた北碑とともに比較的纏った領域を形成しているのは漢碑である。今後は、その検討とともに彼の論書で大半を占める法帖論についても探ってゆきたい。

注

（1）拙稿「沈曾植論書研究引述」福島大学国語学国文学会『言文』四五号、一九九七年

（2）拙稿「『寐叟題跋』の書法」『福島大学教育部論集・人文科学部門』六一号、一九九六年

（3）前掲注（1）拙稿第一節7参照

（4）拙稿「羅振玉旧蔵『沈乙盦尚書手簡』初探」『福島大学教育学部論集・人文科学部門』六三号、一九九七年

（5）更に10も『同声月刊』一巻二号「海日楼詩」巻一に収められる。

（6）拙稿「近代碑学理論の展開における「玉梅花盦論篆」の位置」中国文史哲研究会『集刊東洋学』七四号、一九九五年、第二節

（7）未刊。北京図書館蔵抄本による。著者は該書の一部（全体の約三分の一）を閲し得、そのうち第五首までは「北京図書館蔵『稷山論書詩』尋釈（上）」（『福島大学教育学部論集・人文科学部門』六五号、一九九八年）として翻刻した。残りも続稿

で翻刻予定である。

(8) 狄氏『宋拓張猛龍碑並碑陰』(有正書局・民国二八年)題跋。尚、杉村邦彦「近人の張猛龍碑題跋を読む」(書論編集室『書論』二一号、一九八三年)も参照した。

(9) これら阮説を貶斥する諸論については、前掲注(4)拙稿第四節で少しく触れた。

(10) 前掲注(4)拙稿第四節

(11) 前掲注(7)拙稿の翻刻を参照。尚、続稿では、かかる陶説の互証論に検討を加える予定である。

(12) この点については、西林昭一「王羲之父子に対する書の優劣論」(『跡見学園国語科紀要』一七号、一九六九年)に依るところが大きい。

(13) 李瑞清「楷書散文軸(臨石門銘)」(『染雲軒蔵書法篆刻選』上海書画出版社・一九九〇年)識語、『李瑞清臨六朝碑四種』(震亜図書局・民国四年頃)曾熙跋

(14) 馮氏『鈍吟書要』に「晉有南北、書亦有南北」とあり、陳氏『隠緑軒題識』「論唐人双鉤蘭亭序」に「歐褚分途、遂令禊帖亦有南北宋之異矣。」とある。

(15) 劉氏「梁啓超的拓本収蔵、題跋及書法」龔亜平等編『梁啓超墨蹟書法集』一九九五年、栄宝斎。劉氏は、分期について言及のある梁跋として「元景造像記跋」「鄭道忠墓誌跋」「恵猛墓誌跋」を挙げておられる。

(16) 前掲注(4)拙稿では、尺牘21を中心に、羅・沈の交誼を概観している。

(17) 胡氏「文化視野中的沈曾植」書法研究編集組『書法研究』四九輯、一九九二年

(18) 耿氏「略論康有為、沈曾植書学思想之異同」康有為国際書学研討会(一九九六年)発表論文

(19) 康氏の評語の抽出は、西林昭一「碑学派に関する一考察」(『跡見学園国語科紀要』一六号、一九六九年)第二、三章での検討結果に基づいている。

(付記) 小論脱稿後、王敏輯『北京図書館蔵善拓題跋輯録』一九九〇年、文物出版社)に、『寐叟題跋』未収の刁遵墓誌跋が翻刻されていることを知った。また。葉昌熾『語石』巻四・墓誌にも、沈氏の高湛墓誌評(初見)が紹介されている。

(福島大学)